



2025.9.15

No.247

編集・発行人 樋口みな子

E-mail: minginga@agate.plala.or.jp

URL: <http://www.minaginga.sakura.ne.jp/index.html>

ゆうちょ銀行から

(記号) 19710 (番号) 02218911

他銀行から

(店番) 978 (口座番号) 0221891

ヒグチミナコ (郵送料年間 2,000 円)

被爆 80 年、被爆者運動を市民の一人として支えたい

—反核医師のつどいに参加して—

8月30～31日と第35回反核医師のつどいに参加しました。まだ入会したばかりの上に医師でもない私でもいいのか?と躊躇する気持ちもありましたが行って良かったです。

東京は今年一番の38度の猛暑。御茶ノ水の全労連会館に道に迷いながら到着。

「被爆80年、被爆者運動・被爆者医療の歴史を検証する」テーマで4人のパネリストのお話が始まりました。



日本被団協代表委員の田中熙巳(てるみ)さんは昨年12月のノーベル平和賞受賞式でウクライナとパレスチナの戦争に言及しました。

「今日、依然として12000発の核弾頭が地球上に存在し、4000発近くの核弾頭が即座に発射可能に配備がされているなかで、ウクライナ戦争における核超大国のロシアによる核の威嚇、また、パレスチナ自治区ガザ地区に対しイスラエルが執拗に攻撃を加える中で核兵器の使用を口にする閣僚が現れるなど、市民の犠牲に加えて『核のタブー』が壊されようとしていることに限りない悔しさと憤りを覚えます」と話されたことに感銘を受けました。田中さんがつどいでどんなことを話されるか関心がありました。この日の講演でも核兵器が抑止力だと言いつつ、政府を批判しました。最後に「被団協の運動は被爆1世が担ってきた。でもこれからは新たな世代で担う人が増えてほしい」と話されました。



シンポジウムで発言する田中熙巳さん

広島大原医研などで長年、被爆者医療を担ってきた斎藤紀(おさむ)医師(福島市・ふれあいクリニックさくらみず)は被爆者の寿命調査などをグラフで示しました。原発

訴訟にも長年関わってきて、1969年から2005年までの個別原爆訴訟では36年間で高線量被爆で悪性腫瘍のみしか認定されなかったことから、2005年から集団訴訟に転換して勝訴率は79.4%となったのは、被爆の実相を明確化したことで原因確率論を打破できたからと語りました。

お二人のお話をまとめ、参加者を代表する形でフレッシュな河野絵理子さん(長野中央病院医師)と松久凌大さん(秋田大医学生)が質問しました。河野さんは長野反核医療者の会を立ち上げた中心メンバーで、7月の「北海道反核医師の会」の総会で長野の会がどんな経緯でできたかを語り、「反核平和への思いを共有しあえる」「一市民として行動できる場」と話し、とても共感しました。私は北海道の会が「核戦争と原発に反対する北海道医療者の会」に改組したのをきっかけに入会しました。会場でお話する機会がなかったのが残念です。

翌日は斎藤とも子さんの記念講演「ヒロシマからフクシマ、そして未来へ～肥田舜太郎先生の教えを胸に」を聞きました。斎藤さんは数多くの演劇や映画に出演されている俳優で、表現力抜群でした。肥田先生との出会いは原爆投下後の広島を舞台にした井上ひさし原作の「父と暮せば」に出演することになり訪ねたのが縁だったと語り始めました。2003年7月に会って、肥田医師が「投下前日にヒロシマから少し離れた場所に往診に行った子どもに命を助けられた」という体験を聞き、原爆症と認められない人々の診察も無料でされたり、生涯、被爆者医療にささげた人生をずっと敬愛してきたと語りました。ずいぶん時が経ちましたが、私は2012年に北海道反核医師の会の記念講演を聞いた日を思い出しました。その時も「往診した子どものおかげで自分は助かった」と語ったのです。当時の講演から引用します。



講演する斎藤とも子さん

「原発や核兵器に賛成するという側には絶対に皆さんは立たないでほしい。それから子供にも、大きくなる間で核というものには人間には場合によっては役に立つことがあるなんていう論理にだまされないように、子供さんにもきちっと伝えていくということ。今日初めて聞いたのなら、今日学んで、それを明日から行動で示して、日本中の人々が一致してそっちへ向かうように、行動でなくす方向に努力をするということをお願いしたい」(2012年6月

多摩市平和展に参加して

8月17日に第34回多摩市平和展に行ってきました。そこで、ひらお保育園の「平和の集い」でもこれまで何度もお話をさせていただいている、被団協の事務局長になられた濱住治郎さんのお話や、今回のために被曝ピアノを移送された調律師の方のお話、なかでも多摩市から市長らと共に小学生有志として広島での追悼式に参加した男子児童さんの、広島から戻りご自分で作曲されたという曲の演奏は素晴らしいものでした。

午後には、満蒙開拓団について、信越放送ドキュメンタリ一番組として放送された『沈黙の奥底～河野村分村が問いかけるもの～』(制作・手塚孝典)の上映と、3人のパネリストのお話とがありました。ここでは、長野県阿智村にある満蒙開拓平和記念館館長の寺沢秀文さんのお話で、全体的なことが見えてきました。それは、国策として全国から27万人の「満蒙開拓団」(一般開拓団と青少年義勇軍)が組織され、渡満して約8万人もの犠牲者を出し、なかでも47都道府県で突出して多くの人たち(33,000人)を送り出した長野県。なぜそれほどまでに多くの人たちが渡満することとなったのか、被害と加害の両面を持つ満蒙開拓という史実について語られました。

また今回のシンポジウムで印象に深く刻まれたのが、胡桃沢(くるみざわ)伸さんの話でした。それは彼の祖父であり、当時の長野県河野村の村長として村人を開拓民(開拓ではなく略奪・侵略であり、移民ではなく入植です、と彼は語ります)として送り、ソ連参戦後の敗戦直後の1945年に、入植村民(総勢95人の河野村開拓団)のほとんど、70名もの集団死という事態につながるその事実(そのほとんどが女性と幼い子どもだった)。そして翌年にその事実を知った祖父(村長)が、「開拓民を悲惨な状況に追い込んで申し訳がない。後の面倒が見られぬことが心残りだ。家と財産は開拓民に解放してやってくれ」との遺書を残し、42歳の若さで自ら命を絶った村長・胡桃沢盛。



銀河通信へのおたよりから

●山梨県北杜市、日本で一番高いところを走っている JR 小海線の甲斐小泉駅(標高1000メートル)に実っていたアケビです。まだ青いですが、そのうち紫色になり、口を開けると小さな種を取りまくとろりとしたところが美味しいのです。日本エスペラント協会研修施設があり、9月に訪問、勉強した帰りに駅で撮影、スケッチしました。

(前橋市・堀泰雄さん)

16日、反核医師の会と医療九条の会北海道との共催、講演要旨から)2017年に100歳で亡くなった肥田先生の遺言だと改めて思いました。

私は平和・環境(反原発も)・人権をテーマに個人通信『銀河通信』を発行して37年になります。全国からつどいに参加された150人を超える医師をはじめとする医療に携わる皆さんから大きな励ましをいただきました。

(文と写真 元臨床検査技師・樋口みな子)

田中 雄二

10代の頃は、大正デモクラシーに影響を受け、保守的な農村にありながら進取の思潮に傾倒し、自由主義の理想を抱き、理知的で多様な視点から物事を捉えることができたにもかかわらず、盛はなぜ、国家主義に追従し、聖戦イデオロギーに絡め取られていったのか。

(『幻の村～哀史・満蒙開拓』早稲田新書、手塚孝典著)

* * *

資料など読む中で、長野県の満蒙開拓団に送出した人数が47都道府県の中でも圧倒的に多いというその背景に、『教員赤化事件』の不名誉に対する挽回という記述を見ました。(満蒙開拓平和記念館・館長 寺沢秀文氏の資料より)

これを見て、私が働いてきた保育園の法人、厚生館の初代理事長、西條億重氏の若き日の活動(教育実践、研究会と共に地域での組合活動など組織作り等)などが思い出されました。西條氏が1933年に逮捕、収監された「二・四事件」。この年に、自由主義思想、共産主義思想に関わるもの、農民・組合活動関係者など、200名にも及ぶ多くの活動家が治安維持法のもとに検挙され、なかでも、活動の中軸を担っていた億重理事長はその後逮捕され、長野から東京の市ヶ谷刑務所に移されて2年余り収監される、という事実がありました。ちなみに、この33年には、長野県同様に全国で多くの逮捕者が出て、小林多喜二も東京で逮捕、激しい拷問を受けて殺されています。

こうした軍国化につながる31年の満州事変、翌年の満州国の建国、33年の大規模な逮捕、そして36年に閣議決定で満蒙開拓団が日本の国策となる、そうした日本の分岐点とも言える事実であり、法人の歴史とも関わっていることを知りました。

* * *

精神科医であり劇作家でもある盛の孫・胡桃沢さんは、当時に克明に書き連ねたその祖父の日記と、国内でも史実の伝承が大変に少ない満蒙開拓という過去を通して、加害と被害の絡まりあった戦争の実態について考えてみたい、と語られていく…。お話を聞いた後もずっと心で反芻している自分がありました。(国立市・あそびの広場「風の音」主宰)



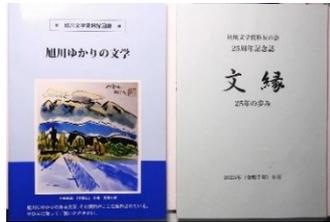
自宅の白百合(7.20撮影 高橋偉さん)

記念誌「文縁」、図録「旭川ゆかりの文学」の発刊に寄せて 黒田 忠

今年旭川文学資料友の会が創立 25 周年をむかえました。これまで会を支えてくれた会員各位や関係者の皆様に心から敬意を表します。当会の記念事業として取り組んできた記念誌「文縁」、図録「旭川ゆかりの文学」が完成し出版されました。微力ながら編集に携わることができたことは望外の喜びです。

私は主に資料の写真撮影に取り組みました。最初のうちは十分な撮影機材もなくどうなることやらと危惧しましたが、何とか撮り終えることができました。支給された SD (SDHC) カード (写真のデータを記録・復元する記録媒体) は 32GB (ギガバイト～情報量の大きさの単位) で、撮影枚数は約 8000 枚に及びました。最初は自分の影が写りこんだり、照度が足りないなど失敗続きでしたが、撮影するための小さなスタジオが完成してからは失敗が少なくなりました。自分の影が写りこまないようにするために脚立を使用し、照明も 2 方向から媒体を照らすようにしました。脚立の階段は 3 段くらいのものですが、1 枚の写真を撮るたびに上り下りするので、1 日作業すると結構なエネルギー消費につながりダイエット効果もあった?…

記念誌「文縁」では「文学資料展・企画展の記録」のパンフレットの写真を撮影しました。私が企画展の展示作業のお手伝いをさせていただくようになったのは 2021 年 5 月の「木野工『旭川今昔ばなし』直筆原稿展」からだったので、第一回「旭川文学資料展」2001 年から今までの歴史を刻んできたパンフレットを目にして、本当に旭川文学資



(左) 図録「旭川ゆかりの文学」
(右) 記念誌「文縁」

料館にはお宝が詰まっているなど実感することができました。何よりも自慢なのは、これらのパンフレットを作製したのが学芸員の沓澤さんやボランティアの人たちの手によるものだということです。

公立の大きな文学館等ではほとんどはプロのグラフィックデザイナーに依頼して作成していると思うのですが、当館の場合は自前で作成しているのです。もちろん印刷は業者に依頼しています。創館以来ボランティアの皆さんが展示やキャプションを手作りしてきたという伝統を受け継いで運営しているという一例です。図録「旭川ゆかりの文学」では、文学資料館所蔵の色紙、短冊、直筆原稿、写真資料などの撮影をしました。色紙、短冊では著名な文学者や画家の作品に直接触れることができました。「大雪山の北修」と言われた高橋北修の色紙は図録の表紙を飾る絵として選ばれました。その他、関兵衛、朝倉力男、畦地梅太郎、一原有徳、佐藤忠良、田辺三重松、外山卯三郎、難波田龍起、丸木俊、村山陽一など貴重な色紙の数々。誰がどのような経緯で所蔵し伝えてきたのか、それだけで一つの物語が語られるような貴重な色紙です。短冊、直筆原稿についても同じような思いを抱きました。所蔵生原稿の一覧も作成しました。

旭川文学資料館は宝の山です。これからも企画展などを通じて、これらのお宝を市民のかたにご覧いただける機会を設けて行きたいと思えます。(旭川文学資料友の会理事)



旭川文学資料館が入っている
旭川市常盤館

響き合うパレスチナとアイヌ 松元 保昭

7 月 12 日 (土) 札幌市教育文化会館研修室にて 100 名弱の聴衆を迎え、さらに 50 名のオンライン参加を加えて第 5 回反植民地主義フォーラム in 北海道「響き合うパレスチナとアイヌ」が開催されました。

集会準備に労された方々、ご賛同いただいた方々をはじめ参加者のみなさまには改めて御礼を申し上げます。冒頭、ガザの犠牲者を追悼して全員の黙祷をもって始められました。

緊張感に包まれた会場で、板垣雄三先生は学者の解説などでなく地声で自らの問題意識をレジュメに沿って語り始め、3 時間近く終始庶民のことばで所信を語り尽くした。

メディアなどに流布される歴史の落とし穴は、「だまし・スリカエ・おどし・とぼけ・偽善など」に覆われていて気が付くのに時間がかかる。イスラエル諜報機関に支配されていた「イラン・イスラーム革命」を知らない人々の「イランの核問題」、イスラエルの核使用を知らない人々の「イスラエル核武装」、ウクライナ民族主義ネオナチとイスラエル・アメリカも関与した 2014 年マイダーン・クーデターを知らない人々の「ロシアのウクライナ侵攻」、あるいは、ナチ政権の棄民政策＝パレスチナ植民事業とシオニストの共犯関係、さらに「ホロコーストの利用」「反ユダヤ主義の

利活用」を知らない人々の「イスラエル」理解など、いたるところに落とし穴が仕掛けられているのが、現実の歴史だ。これに抗い庶民のことばで一枚一枚化けの皮を剥ぐように語るには、膨大な時間が必要となるだろう。

板垣先生の知的誠実、パワポ印刷用を参加者のために別途準備されたくらい庶民の言葉でこの手間を厭わず地声で語り続けた(「だまし・スリカエ、ボタンの掛け違い」などは学問用語ではない)。

時間配分に責任ある主催者としては、94 歳の老碩学の知的誠実を札幌に遺していただくことを優先したぎりぎりの判断でした。時間超過を招いたことは、後続の発言者にも参加者のみなさんにも、お詫びを申し上げなければなりません。

とはいえ、振り返って改めて深刻に考えさせられた

ことは、われわれ和人の側がアイヌ・琉球・在日の方々と、あるいは「朝まで生テレビ」じゃないけれど、その相互の間でも長時間語り合い聴き合ったことがどれだけあったであ



発言する成田得平さん

ろうか、ということだ。本来ならアイヌ・琉球・在日のそれぞれ数人の方々に発言してもらってから考える必要さえあったのではないかと互いに語り合いを深めることなく見過ごし、「だまし・スリカエ・おどし・とぼけ・偽善」を見抜

けずってきた、列島の「われわれ」ではなかったのか？
(紙面の都合でアイヌの方の発言は掲載できませんでした)
(パレスチナ連帯・札幌代表)

福島第一原発視察会に参加して(その2) 福原 正和

二日目は東京電力ホールディングス(以下東電)による原子力発電所視察。

東電差し回しの大型バスでまず廃炉資料館に行き、本人確認の身分証明書の提示、施設内はスマホ・スマートウォッチ等一切の記録機器は持ち込み禁止の説明を受ける。原発敷地入口では空港と同じ金属探知機を通り、各自「立ち入り許可証」と放射線バッジを胸に付け何人もの警備員がいる中入口にすすむ。バスで窓は開けないよう言われ敷地内を林立するタンク群を横に見ながら移動、第一原発近くの高台デッキで降車して説明を受ける。元々海拔30m以上の土地だったが岩盤に直接建設するために海拔10mまで掘り下げて原発を建設、その為高台縁のデッキからは第一から第四まで4つの原発を見下ろすことが出来る。

働く多くの作業員が小さく豆粒ほどに見え、近くで見ると原発の巨大さに改めて驚く。1号機は鉄骨・瓦礫が剥き出しだが撤去すると放射線物質が拡散するとしてそのままの状態。2号機は壁が破壊されそこから蒸気が漏れたため水素爆発はしなかったが、最も多くの放射性物質を環境に撒き、中は放射線量が高く今も人は入れない状態と。1・2・3号機はデブリがそのまま残り、今まで2回(0.7gと0.2g)遠隔ロボットによる取り出しが行われたが、残り推定880トンのデブリの取り出しはいつ完了するのかは?? 豆粒程の大きさの多くの作業員がマスクをして作業をしているのが見えるが、私達が視察した高い場所ではマスク使用は解除されているとのこと。バス内にある放射線測定器が入口出発時は0.1 μ Sv/hであったが原発に近づくとつれて26 μ Sv/hまで上昇、まだまだ放射能汚染が酷いことを実感する。

全体の印象として浪江町津島地区の問題は広島・長崎での「黒い雨」と同じで、爆心地からの距離で被害の大きさが単純に決まるわけではなく、その時の風の状況によって放射線物質「死の灰」の降下量と地域が変わり、被害が発生する事を知りました。バスで走ると立派な道路(ゼネコン施行?)が目立つが、住民が戻って生活するための復旧・

復興は後回しでまだまだと感じました。

福島第一原発の大きな施設の中で電気を生む為でなく「廃炉」の為にのみ働く作業員は一日平均約4500人(事故直後の多い時は8000人)。その費用は年間2000(25年度2605)億円に上り、それがいつまで続くか分からない状況で最低でも40年間8兆円かかると。この費用は「廃炉作業」のみの費用で、被害者の補償や地域の除染作用は含まれず、その費用等を含め復興費用は現在までで40兆円をこえるという(NHK)。その膨大な費用は誰が負担するのか。廃炉資料館には多くのスタッフがあり、丁寧な対応をされるが、そもそもその人件費も本来必要なかったものだと思うと複雑な気持ち。原発周辺には広い敷地に「中間」貯蔵施設として多くのフレコンバックや除染土砂が貯蔵されているが、中間ということはいずれ「最終」施設に移動すると言う事。それをどこの地域が受け入れるのでしょうか。

この視察ツアーで原発事故被害の大きさを見て今私が思うのは、2014年福井地裁樋口英明裁判長による住民の大飯原発差止訴訟判決「被告は本件原発の稼働が電力供給の安定性、コストの低減につながると主張するが、当裁判所は、極めて多数の人の生存そのものに関わる権利と電気代の高い低いの問題等を並べて論じるような議論に加わったり、その議論の当否を判断すること自体、法的には許されないことであると考えている。…国富の流出や喪失の議論があるが、…豊かな国土とそこに国民が根を下ろして生活していることが国富であり、これを取り戻すことができなくなることが国富の喪失であると当裁判所は考えている」。私はこの勇氣ある樋口判決に心から共感し尊敬しています。

浪江町民が多く避難した二本松市に仮設津島診療所が作られました。北海道反核医師の会会員である峯廻攻守先生は2014年から希望して三年間その診療所に勤務されました。会計の私は会計監査である峯廻先生を訪ねて二本松市に通い監査を受けました。(北海道反核医療者の会)

銀河通信へのおたよりから

●キレンゲシヨウマは徳島県の剣山の自生地が有名です。宮尾登美子は小説『天涯の花』で「月光のように澄み、清らかに輝いていた」と剣山のキレンゲシヨウマを讃えています。小説の象徴でもあるキレンゲシヨウマは、数奇な運命に負けずに成長していく主人公珠子の人生そのものです。お月様色と称された花は花卉が半開



き状でやや下向きに咲き、丸い蕾もきれいで造形の妙と言えます。自生地の開花は7~8月ですが、我が家ではだいたい9月上旬に開花を迎えます。夏の暑さと乾燥には弱く、蕾のまま落ちてしまうこともあります。この花は亡きM氏から引き継いだものです。花言葉は「幸せを得る」「秘密の思い出」です。(旭川市・黒田忠さん)



自宅近くの公園で見た夕焼け
(9.9 撮影 樋口みな子)

市民・メディア・権力 私たちはどう生きたいのか？

～青木理さんの講演で印象に残ったこと～ 遠藤 高弘



7月29日(火)に青木理(おさむ)さんを中心とした戦後80年企画シンポジウムに参加してきました。

道新記者の長谷川綾(あや)さんの進行で、道警ヤジ排除裁判元原告で札幌地域労組専従の桃井希生(きお)さん、北海道大学文學院の成瀬真己杜(まこと)さんが関連して発言していますが、青木さんの発言に絞った要旨です。

「今回の選挙では底が抜けたと思った(何でもあり)。政党名を口にしたくないが、参政党の新憲法草案は怪文書で、笑ってしまった。いったい700万もの票をどうやって吸い寄せたのだろう？ 過去には、右よりだろうが左だろうが、ここだけは共有すべき一致点があったのだが、日本は自由と民主主義が根付いていなかったのか？」

「80年代に民放が報道番組を始め(久米宏や筑紫哲也ら)、サンデーモーニングは「まじめで真実を伝えている」とも「偏向報道だ」とも言われたが、関口宏さんは「何も変えていないのに周りがずれてきた」と言っていた。参政党の件は、メディアのあり方と日本の教育問題が影響している。今、欧米はバックラッシュ(反動やゆり戻し)が起きている」

「日本は300万人外国人を使っているが、まともな権利

を保障していない。日本は事なかれ主義、メディアはもっと悪くなっていく。

朝日新聞は最高800万部読者がいたが、いまや400万部を切った。デジタル版に移っているわけではない。私は2002～2006年に特派員として韓国にいた。金大中(キム・デジュン)大統領の頃。韓国は民主化において成功体験しているが、一つだけ心配なのは、日本人は民主主義を自分で勝ち取っていない」

「日本は社会保障含めこれからが本当に大変だ。20代、30代の人達にどんな社会を残すのか。と言うより、今の50代、60代はいったい何をやってきたんだ! と彼らは訴えるだろう。50代、60代は『恥の世代』と言う人もいる。私は少しでも抵抗して、爪跡くらいは残そうと思っている」

私はそれなりに活動してきたつもりです。しかし、あらゆる分野で「政治の話はやめてくれ」と発展しませんでした(患者さんとはよく語り合いましたが)。そのつけが回ってきましたが、まずは8月3日から始まる、原水禁世界大会で大きな世界的世論を感じたいと思います。(歯科医師)

映画『正義の行方』

飯塚事件—無実の被告を死刑で口封じたのではないか 石川 旺

NHKのドキュメンタリー・劇場版映画への批判

2022年4月23日、NHKは3時間番組『正義の行方～飯塚事件30年後の迷宮』を放送した。このドキュメンタリーの最大の問題点は、冤罪の疑いの濃い事件について司法が批判を避けるために緊急に死刑を執行したのではないかという疑惑に対し、ほとんど全面的に警察・検察を弁護し、疑惑についてはタイトルで「迷宮」としていることである。事件は「迷宮」ではない。有罪確定とされ、死刑の執行まで既に行われている。そしてその有罪確定の決定的証拠とされた旧式のDNA鑑定への疑問が提出されたのに対し、新技術での再鑑定を行わず急いで死刑を執行したことについて、番組はきちんと時間関係を提示していない。

同じ旧式のDNA鑑定を有力証拠とした足利事件について、検察がDNA再鑑定に反対しない意向を示したと2008年10月16日のNEWS ZEROが報じ、翌日各メディアが一斉に再鑑定が行われる見通しを報じた。それから12日後に飯塚事件の被告の死刑は執行された。

足利事件に続いてさらにDNA再鑑定で有罪が覆れば、司法界全体の信頼性が大きく揺らぐ。そのために死刑判決確定後の年月がわずか2年と異例に短いにもかかわらず死刑が執行されたのではないかと強く疑われる。

そのあたりはNTV清水潔ディレクターがドキュメンタリー「死刑執行は正しかったのか～飯塚事件・真犯人の影」

(NTV 2022.9.25)で的確に指摘し、さらに事件の目撃証言の信頼性についても決定的と言えるような疑問を提出し

ている。また日弁連もこの事件の経緯について重大な疑問を提出している。

1992年に福岡県で起きた女児二人の殺害事件である飯塚事件と足利事件で共通に用いられていたのはMCT118というDNA鑑定法としては初期の信頼性の低いものであり、技法も同じ、鑑定技術者も両事件で同じメンバーであった。足利事件のDNA鑑定に疑問が出たら、同じDNA鑑定の飯塚事件も見直そう、というのが普通の頭脳が考えることである。しかし番組に登場した捜査関係者にはそのような考えは皆無で、ひたすら真犯人だと主張し続けた。足利事件に次いでもう一つ死刑判決破棄が出ることを嫌ったとしか思えない。しかも捜査段階での証言の誘導・捏造などの可能性までが明るみに出る可能性があった。検察、裁判官、死刑執行に署名した当時の森英介法相にも飯塚事件を見直すという姿勢は見られず、NHKのドキュメンタリーにも当然見直すべきであったという姿勢は無い。

劇場版『正義の行方』について

問題だらけのドキュメンタリーをさらに劇場版として公開する意図は何か。内容のほとんどは放送内容と重なり、一部新しい情報も付け加えられている。

劇場版の前半はほとんどが警察関係者の捜査の経緯と警察の見解をたどることに終始している。後半でDNA鑑定の問題点、目撃証言の誘導捏造の可能性などが指摘される。しかしこれらの証拠の脆弱性の検討は清水ディレクター制作の番組の鋭さに比べると著しく見劣りがする。しか

もそれらの証拠への疑問に対して映像ではいちいち警察関係者の反論が付されている。

劇場版の見どころは 2017 年以降に西日本新聞が行った事件の再検証報道であるけれども、その説得力ある再検証に対し、最後に当時捜査を指揮した警察 OB が締めくくりとして「あの事件以後、幼女に対する犯罪は起きていない。ということはあの被告は真犯人だ」と確信的に述べる。捜査指揮官の頭脳能力の低水準が露呈してはいないか。「犯人」とされる容疑者が逮捕されたら、真犯人は行動を抑止するか、他の土地に移転して犯罪を重ねるかであろう。その後地域内で類似犯罪が起きていないから被告が真犯人というのは非論理であり、それに対してドキュメンタリー制作者や映画監督は非論理とせずそのまま提示している。

急遽執行された死刑について、法務関係者への取材は形ばかりでしか報じられていない。なぜこの時期の執行なのか、司法が批判を避けるために死刑という殺人を犯したのではないかという疑惑に対して NHK のスタンスは司法擁護に見える。NHK 番組はタイトルで「迷宮」。清水氏のドキュメンタリーのタイトルはズバリ「死刑執行は正しかったのか」。どちらがジャーナリズムの基本価値を実践しているかは自明である。(メディア研究者)

札幌で『正義の行方』の上映会がありました。私もなんだか納得がいかず、石川さんの論考を皆さんにもお伝えしたいと思いました。(み)

お薦め本

知られざる残すべき戦争 体験を聞き取った



1945 最後の秘密

三浦英之著 集英社 2,200 円

メディア・アンビシャス主催の講演会で著者・三浦英之さんが語られた建国大学一期生・先川祐次さんの物語に深く引き込まれました。会場には先川さんの長男の先川信一郎さん(元北海道新聞北京とワシントン支局長、ジャーナリスト)もご出席で、歴史の証人がそこにいるという重みを感じました。

第4章「101 歳からの手紙」は先川さんが亡くなる少し前に三浦さんへ送った一通の手紙から始まります。その記憶力の確かさと、語られる内容の濃さには驚かされました。満州で学び満州国の建設に関わった経験を後世に残したいという強い思いが、先川さんの語りを支えていたのだと思います。

先川さんは満州事変を目撃し、建国大学に1期生として入学。卒業後は満州国の総務庁で官僚として働き、外国の諜報業務にも携わっていました。戦後は西日本新聞に入り、ワシントン支局長としてケネディ暗殺事件にも遭遇するなど、激動の時代を生き抜いた方です。

亡くなる 2 カ月前に著者へ送った手紙には、少年期の満州の街並みや人々の暮らしがまるで映像のように描かれていました。多民族が共存する国際的な雰囲気の中で、知的な交流があったことにも驚きました。軍国主義が支配していた時代に、こんなにも開かれた世界が存在していたのです。

また、満州には多くの民族がひしめき合うようにして住ん

でいて、日本とは全く違う国際的な雰囲気だったこともわかります。「手紙」は、元新聞記者らしく数十枚の原稿形式になっていて、そこには自らの人生における出来事だけでなく、少年期や青春期に過ごした満州国内の街の様子や人々の生活様式などがまるで目に浮かぶように描写されていました。

そして明かされた秘密。先川さんは息子にも語らなかった秘密を明かします。消滅間近の傀儡国家から大量の阿片を密輸した、満州国最後の「極秘秘密工作」が記されています。

著者に語り、記事にもなり、安心して眠るように亡くなった先川さん。「銀幕の向こうに、かつて若き海外特派員が目にした風景が広がっている、その映像を観ながら、私は知らず知らずのうちに涙が零れ落ちそうになった」という記述に私も思わず涙しました。101 年に及ぶ壮大な人生。その歩みの一つひとつに、言葉では言い表せないほどの感動を覚えました。

私の父もまた、戦争の時代を生きた一人でした。大正 11 年生まれ、福島県矢祭町の出身。旧制中学卒業後、通信兵として南方に赴きましたが、途中でマラリアにかかり帰国。その後、親戚も知人もいない北海道に渡り、国家公務員試験に合格して日高の山奥に赴任しました。母は淡路島から移住した開拓農民の長女で、札幌の女学校を出て農協で働いていた時に父と出会い、結婚。私はその長女です。父が亡くなったとき、ふるさとの矢祭町を調べてみました。日高の沙流川溪谷と矢祭町の溪谷がよく似ていて、父はこの風景を見て、遠い故郷を思い出していたのかもしれない。

本書には、新潟で終戦直前に行われた原爆疎開の話も登場します。原爆投下の候補地だったことや当時の畠田昌福知事の業績はほとんど知られていません。三浦さんが訪ねた三男・哲男さんは寡黙な方で取材は難航しましたが、「疎開は良かったと思う」と語った場面に胸が熱くなりました。

その後、畠田さんは横浜市助役となり、「港の見える丘公園」を造りました。「親父はずっと『あの公園』を造りたいと言っていた。『あの公園』こそが平和の象徴なんだから」と語る哲男さんの言葉が、父の願いを代弁しているようで、心に残りました。三浦さんが「新潟に似ている」と記した公園からの描写は、まるで黒澤明の『生きる』の一場面のようで、私にとって本書の中でも最も好きな場面です。

『1945 最後の秘密』は、戦争の記憶をただ語るのではなく、そこに生きた人々の思いを、静かに、しかし力強く伝えてくれます。歴史を継ぐとは、こうした声に耳を傾けることなのだ、改めて感じました。(樋口みな子)

匿名であれば何をしてもいいのですか？

踊りつかれて

塩田武士著 文藝春秋社 2,420 円

あなたは、SNS に書き込むその一言が誰かの命を奪うかもしれないと考えたことがありますか。兵庫県知事のバワハラを告発した県庁職員が SNS での激しいバッシングにより自死に追い込まれた事件は決して他人事ではありません。

物語の中でも、不倫を報じられたお笑い芸人・天童ジョージが誹謗中傷に晒され命を絶ちます。伝説の歌姫・奥田美月も週刊誌の虚報に翻弄され、人前から姿を消しました。



二人の支援者である元音楽プロデューサー・瀬尾は、匿名で誹謗中傷を行った83名の個人情報をネット上に公開します。法を犯してまでネットリンチの恐ろしさを告発する瀬尾と、それに寄り添う新人弁護士・奏の闘いが描かれます。奏は経験の浅い弁護士ですが、

天童ジョージとは中学の同級生。彼の言葉のセンスに親しみと敬意を抱いていました。その感性の共鳴が、彼女の行動の原点となります。

匿名のコメントの先には、生身の人間がいる。一人ひとりに、歩んできた人生がある——そのことに思いをはせるだけで、誹謗中傷は減るのではないか。そんな問いかけが、物語の根底に流れています。

美月、天童ジョージ、奏、それぞれのキャラクターは鮮やかに描かれ、個性が際立っています。SNSがもたらす現代の問題を、芸術的な視点から言語化している点も見事です。エンターテインメントの歴史、大衆心理の変遷——「真理」が無意識のうちに変容していく恐怖を、私たちはどう受け止めればよいのでしょうか。

自分も知らぬ間にその渦に巻き込まれているのかもしれない。そのことを、俯瞰して見つめる機会を与えてくれる作品でした。直木賞候補に挙がりながら受賞には至らなかったことが、なんとも惜しまれます。

死を想う、光の中で

新版「死を想う
われらも終には仏なり」

石牟礼道子・伊藤比呂美著 平凡社
新書 836円

石牟礼道子さんが亡くなったあと新版で刊行されました。2018年に東京で開かれた「石牟礼道子さんをしのぶ会」に私も参列しました。「苦海浄土」「椿の海の記」は私の大切な本です。

「この次、おいでるときは、私たちはおりません。お名残り惜しゅうございます」と五島のおばちゃんのことを語っていた石牟礼さんに伊藤比呂美さんの「もう会えないという事実、ただ涙がとまらない」と別れを惜しむ言葉が重なります。みないつかは死ぬ存在だけど、それがいつなのか結局死ぬまでわからない。大切な人に「今度会えるときまで生きていてください」と思わずにはいられません。私自身この2年間で夫、母、妹、義姉をいっぺんに亡くし、その喪失感から、自分の死を見つめたいと思いました。

伊藤さんと石牟礼さんの対談形式で明るく進んでいく「死」にまつわる話の中に、「苦海浄土」をはじめとした石牟礼作品を貫く「死と生の見つめ方」「死」の生き方、のようなも

のが見えたような気がしました。

石牟礼さんは語ります。〈畏れというか、融和しているというか、自分もその小さな生命の中の一つで…。宮沢賢治にありますね、「このからだそのみぢんにちらばれ」（詩集「春と修羅」）というの。それと「宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう」（「農民芸術概論綱要」）というのもありましたし〉(147p)



宮沢賢治が宇宙なら石牟礼道子は浜辺、というのわかりますね。どちらも仏教が根底にある。伊藤さんが「石牟礼さんの描く世界には、死よりも、もっと生きているものがいっぱいあって…裏っ返しに全部死が影のようにくっついてる」(p111)と言っているのが印象的です。

石牟礼さんは一つ違いの弟を自死で亡くしています。弟は29歳でした。その日の様子を「空も山も木々も何もかもがとても美しく、倒木さえとても安らかに神々しく見えた。弟はこんな美しい自然の中に還っていったのだと、そしていつか私もそこへいくのだと思うと歓びのような気持ちに心が震えた」と語っています。

私もかつて登ったトムラウシ山で、星が降るような夜空を見上げ、早朝の草原に咲き誇る高山植物の可憐さに心を奪われたあの日、私はふと「天国って、こんなところかもしれない」と思いました。今はもう厳しい山には登れないけれど、あの記憶は私の中で静かに光を放ち続けています。

死への関心ははるか昔に遡ります。私は子どもの頃は体が弱く、長く生きられないと思っていました。日高の山奥の祖父母の家に夏休みに遊びに行き、一人で近くの沙流川や、大きな木の下で遊んでいて、気がついたら、私は意識を失って寝かされていました。一人で遊びに来ていたのです。目が覚めたら、両親がそばにいました。いきさつを知ったのはその時でした。祖父は馬に乗って市街に出て医師の往診を頼み、祖母は私の両親に「ミナコキトク」と電報を打っていました。祖父母の機転に私は救われたのです。

書きながら、記憶のなかにある光と自然が、私を支えてくれていることに気づきました。読んでくださった方の心にも、何かがそっと届けば幸いです。(樋口みな子)



映画の紹介

満州での戦争と性暴力の事実、
なかったことにはできない

『黒川の女たち』 松原文枝監督

昭和初期から、国策として「満蒙開拓団」が中国の満州に送り出されました。80年前の敗戦直後、黒川開拓団の人々は生きて日本に帰るために、ソ連軍に助けを求めます。その見返りに18歳以上の女性たちに性接待を求めました。帰国後に女性たちを待っていたのは差別と偏見の目、誹謗中傷でした。その被害者たちが実態を語るまで、知られることはなかったのです。70年後、黒川の女性たちは加害の事実と犠牲の史実を語ります。



私は特に佐藤ハルエさんが渾身の力を振り絞って公の場で自らの体験を語った姿に涙が溢れました。記録として残したいという願いがあって、その史実を刻んだ碑文まで残しました。

苦しい忌まわしい記憶をずっと心に秘めてきた女性があります。孫からもらった手紙には「おばあちゃん、生きていてくれてありがとう。勇気を出して嫌な思い出を話してくれてありがとう」と書かれていました。肌身はなさず持ち歩くようになりました。その手紙を読んだ日から実名と顔を出して話せるようになった女性は安江玲子さんです。

長い間封印されてきた戦時性暴力の事実がどのようにして明かされ次世代に受け継がれてきたか、そのプロセスが丁寧に描かれています。語りは大竹しのぶさん。(樋口みな子)

戦争のむなしさをあぶりだす

『木の上の軍隊』 平一紘監督

映画の序盤は2人の兵士が木の上に潜むまでの経緯が描かれる。日本軍は伊江島に空港を建設することを決め、空港建設には多くの兵士や民間人があたりました。伊江島での米軍との熾烈な戦争の末期。仲間からはぐれた新兵の安慶名(山田裕

貴)は少尉の山下(堤真一)と合流。木の上で暮らし始めた純朴な青年と軍国主義者の対比がユーモラスに描かれます。

終戦を知らず、ガジュマルの木の上で2年間暮らすのです。木から降りて食料を探しに出かける。ソテツの実はそのまま食べれば毒だが、水にさらして干して団子



にすれば食べられると安慶名は山下に教える。2人は米軍の缶詰も手に入れる。それでも米兵は敵だという山下。

そもそも戦争さえ始めなければ、沖縄が戦場になることもなかったのだ。なぜ戦争を始めたのか。安慶名の問いの向こうには、この戦争に対する本質的な疑念がありました。安慶名にとって「帰りたい」という言葉は、故郷の家を意味しない。それは、壊される前の島。生きていた友人達、病に倒れる前の母。かつての、あの日の沖縄への祈りのような言葉です。安慶名が兵士としての装備を外しながら海へ向かっていくシーンは「木の上の軍隊」から沖縄の青年、安慶名に戻っていく素晴らしいシーンでした(樋口みな子)

銀河通信への感想やおたより

●今回は樋口さんだけでなく、多くの方の記事も載っていて何か文化サークルの様な様相になってきましたね。皆さんの気持ちが一緒になって「銀河通信」を作り上げるのは嬉しい事ですね。(札幌市・福原正和さん)

●私は8月生まれなので夏が大好きです。夏空を飛び交うトンボや、野原で元気な鳴き声を上げるキリギリス、パタパタと音をたてて飛び交うトノサマバツタ。小学校の頃の夏を思い出します。(札幌市・高橋雋さん)

●平和と豊かな自然を守ろう…とする『銀河通信』37周年おめでとうございます。モスクワに6年留学された著者の『ロシアの中のソ連』の書評、大変良かったです。「平等」を重んじてきた社会システムから競争社会になった、という所が考えさせられました。(堺市・ドキュメンタリー作家・堀和江さん)

●銀河通信、毎回読みごたえがあります。「〇月〇日区長になる女」は私も地元で試写と討論の会をやりました。選挙のプロセスであんなに議論をするのが驚きでした。私も地元で賛同する候補者の応援をしますが、政策の議論はほとんどない。選挙カーの運転手が私が最も貢献する領域です。また当選の報が入った時に「万歳はしない」というのも真っ当な考え方で目を開かれました。その後岸本さんは議会の自民党の屑議員たちからあり得ないような汚い言葉を浴びせられてもめげずに頑張っておられるようですが。(神奈川県大磯町・石川旺さん)

●北海道の風景や花の写真を楽しみにしています。映画評も楽しみです。大間原発訴訟で代表として頑張ってきた竹田とし子さんが亡くなりました。竹田夫妻は安保法制違憲訴訟の原告でもありました。「次の戦争の惨禍を亡くそうと知恵を絞って生まれた憲法を、今、次の世代に残す責任があるひとり」として憲法を守る強い思いがありました。(千葉市・大間原発はいらない 勝手に支援団ニュース発行人・菅野真知子さん)

●のびるインゲンやぶどうの蔓を誘引したり、トマトやシトウを収穫したり、わずかに植えてある芝生を刈ったりす

ると、短時間でもかなりの負荷です。銀河通信の中味はすばらしい。沖縄、水俣、大間など全国の皆さんの情報交流の広場になっていますね。(東朝比奈たより発行人・横浜市・高島武雄さん)

●ここ2年ほどは必ず月末に足尾に通っています。我が家から両毛線で桐生まで30分、そこからわたらせ渓谷鉄道で1時間半、往復3000円の旅です。とにかく、足尾行きは楽しいのです。面白いのです。人生が感じられるのです。これからも、元気なうちは、そんな訪問が続くことでしょう。一句詠んだ短歌「足尾駅 一人下車した出迎えは 丸形ポストと電話ボックス」(8月28日)(前橋市・堀泰雄さん)



あとがき

8月の末、猛烈な暑さの東京に行ってきました。せっかくの機会なので講演の後は、東京と旭川(どちらも自宅)をしょっちゅう往復しているMさんとクッキングハウス会の松浦幸子さんと会い、翌日は鎌倉のOさん夫婦とランチと映画をご一緒しました。4人とも長い友人です。生き生きした友人たちの日常を知り嬉しかったです。松浦さんが代表のクッキングハウスは調布市にあり、心を病む人たちと「ともにこの町で心豊かに暮らしていきたい」を理念にした会です。同じ名のレストランではスタッフと一緒にメンバーもランチの仕込みや盛り付け、接客もしているのです。今回は自然派家庭料理を食べられなかったのが残念でした。月曜から金曜 11:30~14:30 まで。お近くの方は是非立ち寄ってくださいね。(みな子)

購読料と寄付をありがとうございます(敬称略) 7.18~9.9 高橋雋 永井智子 菅野真知子 堀泰雄 佐藤正人 佐藤美祢子 石井たか子 文聖姫 戸谷眞智子 菅沼宏之 片山篤子 合計37,000円は印刷と送料に使わせていただきます。

購読料の振り込みは:ゆうちょ銀行(記号)19710(番号)02218911 他銀行からは(店名)978 普通預金(口座番号)0221891 樋口みな子宛にお願いします。